

## 注

- (1) 「諸国の舞楽・延年」『日本の傳統藝能』錦正社 一九九八年八月 四二九～四七二頁
- (2) 「長滝六日祭延年と修験道」『講座・日本の民俗宗教 六 宗教民俗芸能』弘文堂 一九八〇年四月初版2刷 二〇八～二三八頁
- (3) 『説話・伝承学』一二二 二〇一四年三月
- (4) 丸山幸太郎『岐阜県地芝居史』二〇一九年五月
- (5) かけ踊りとも称す。注4および中村茂子「かけ踊り」再考『美術美術史』二五二〇一一年三月を参照した。
- (6) 訓読は、「かにかくに物は思はじ飛驒人の打つ墨縄のただ一道に」日本古典文学全集『万葉集三』小学館、二二七頁
- (7) 清水真澄「長滝寺の宋代木造韋駄天立像と善財童子立像」一三～二五頁、その他宋代の遺物として、「宋代一切経（湖州本）」も存す。後藤時男「奥美濃路・奥飛驒路」『月刊文化財』九五 一九七一年八月。なお平成三年より白鳥町の文化財調査が施行された。
- (8) 清水真澄「美濃と飛驒の仏像」『佛教藝術』二二三号 毎日新聞社 八〇頁
- (9) 日本古典文学大系『古代歌謡集』岩波書店 四一〇頁
- (10) 『梁塵秘抄口伝集全訳注』馬場光子校注 講談社学術文庫 二〇一〇年六月
- (11) 米原正義「美濃土岐・斎藤両氏の文芸」『戦国武士と文芸の研究』桜楓社 一九七六年、横山住雄「美濃の土岐・斎藤氏」教育出版文化協会 一九九二年。なお『小島の口ずさみ』と『源氏物語』の構造的語彙的類同については杉浦清志「『小島の口ずさみ』の成立」(『北海道教育大学人文論究』四二二号 一九八二年三月)や稲田利徳「二条良基の『小島の口ずさみ』と『源氏物語』」(広島大学国語国文学会『国文学攷』一二二二号 一九八六年六月)に詳しい。人の移動と文化伝播の関連について示唆を受けた。
- (12) 濱田隆「濃尾地方における禅宗の興隆と妙心寺派頂相―中世の文芸と絵画の一断面(三)―」『佛教藝術』二六三号 毎日新聞社 二〇〇二年七月
- (13) 井上宗雄「中世歌壇史の研究 室町後期編」明治書院 一九八七年一二月
- (14) 岩田書院 一九九七年二月
- (15) 野田満「『子方』考 古典の中の子供へ2」『東海女子短期大学研究紀要』八一 一九八二年七月
- (16) 長滝の延年の「菓子台まくり」について、赤井達郎『菓子の文化誌』河原書店 二〇〇五年六月に詳細が語られている。
- (17) 青柳隆志「日本朗詠史 研究篇」笠間書院 一九九九年二月 一六八～一七五頁
- (18) 『江談抄』(新日本古典文学大系 岩波書店 一六一～一六二頁)は、大江匡房の談話を蔵人藤原実兼らが筆録したもの。六巻。匡房の死(一一二一年)の前後に成立か。
- (19) 「日本に於ける踏歌の展開」『國學院雑誌』四六四 一九四〇年四月
- (20) 『踏歌節会研究と資料』おうふう 一九九七年一月 一〇頁
- (21) 日本古典文学大系『古代歌謡集』岩波書店 四〇一～四〇二頁
- (22) 新訂増補国史大系『朝野群載』卷二一 吉川弘文館 二九頁 なお「万寿楽」を謡う

のは男踏歌の特徴であることについて、藤原茂樹「古代のことば―踏歌詞の伝統と変化―」(『藝文研究』一〇一 二〇一一年二月)論がある。

- (23) 注17に同。
- (24) 新日本古典文学大系『古今和歌集』岩波書店 四一八頁。なお注によれば、左大臣藤原実頼の子女の成人戒での詠歌記録として、『貫之集』に承平五年(九三五)一二月の記事が残るといふ。実頼は当代の第一人者で、藤原氏の氏長者であった。
- (25) 新潮日本古典文学集成『謡曲集 上』所収「小塩」二二七頁「なにと語らん花盛り、言ふに及ばぬ景色をば、いかかは思ひ給ふらん。げにげに妙なる梢の色、映るふ影もおほはらや 小塩の山の小松が原より 煙る霞みの遠山桜」
- (26) 復刻版 国書刊行会 一九九七年五月
- (27) 注15に同。
- (28) 新日本古典文学大系『拾遺和歌集』岩波書店 一七頁
- (29) 新日本古典文学大系『古事談 続古事談』所収 一三三話 卷二二三、なお『十訓抄』にも同話は採録されている。なお『尊卑分脈』によれば、実方の没年月日は長徳四年十一月一三日。
- (30) 岡田三津子編「資料と注釈 早歌の継承と伝流 明空から坂阿・宗砌へ」三弥井書店 二〇一七年五月
- (31) 西畑実「番外謡曲引歌考(一)―勅撰集を中心に」『大阪城南短期大学研究紀要』五一 一九七〇年五月
- (32) 『古今和歌集』については、新日本古典文学大系(岩波書店)、『和漢朗詠集』、『新古今和歌集』、『平家物語』、『伊勢物語』については、日本古典文学大系(岩波書店)、『古今和歌六帖』については、石塚龍磨稿・田林義信編『校證古今歌六帖』上下 有精堂 一九八四年月、『源平盛衰記』は『古今和歌六帖』の、それぞれの本文および頭注等を参照した。
- (33) 井上宗雄「東常縁年譜」『古今切紙集宮内庁書陵部蔵』臨川書店 一九八三年。なお「五月まつ」歌に関する最新の研究として、大谷雅夫「五月まつ花たちはなの香をかげば」『むらさき』五六輯 二〇一九年二月があり、参照した。
- (34) 校注者外村久江・外村南都子「宴曲集」『早歌全詞集』三弥井書店 四五頁
- (35) 辻本恭子「源平盛衰記」の白山関係記事『日本文藝研究』五五―四 二〇〇四年三月
- (36) 新日本古典文学大系『拾遺和歌集』岩波書店 五頁
- (37) 坂部恵「ふれる」ことの哲学―人称的世界とその根底』岩波書店 一九八三年
- (38) 渡辺裕「サウンドとメディアの文化資源学―境界線上の音楽」春秋社 二〇一三年一〇月
- (39) 吉見俊哉「現代文化論―新しい人文知とは何か」有斐閣 二〇一八年一月

・井上 眞弓(いのうえ まゆみ) 平成30年度現代生活学部現代家政学科教授



「長滝の延年」酌取り



若宮修古館 入り口 2014. 4. 29撮影



「長滝の延年」当弁



長滝白山神社 「六日祭」当日朝 2015. 1. 6



「花奪い」天井に飾られた花をいち早く取る  
「六日祭」は別名「花奪祭」と呼ばれる

(撮影：井上眞弓)



「長滝の延年」田歌（子方の登場）



「長滝の延年」当弁ねり歌（竹・梅の精）



の声」<sup>(36)</sup>である。平安時代前期醍醐天皇代において、月次の屏風絵に添える歌として詠まれたものであり、新春の朝に春告げ鳥である鶯を待ち望む心境を詠んだものである。春は田の神を山から招来する時期である。その春を待ち望むことが詞章より伝わるであろう。このことばに招福除災の意味があることが理解される。また、『素性集』『古今和歌六帖』『和漢朗詠集』にも収められ、この歌も後代まで人口に膾炙された。『源氏物語』でも初音巻頭には

年たちかへる朝の空のけしき、名残なく曇らぬうらゝかげさには、数ならぬ垣根のうちだに、雪間の草若やかに色づきはじめ：

初音巻 新大系②三七八

と当該歌を引いて、物語が始まっている。『源氏物語』では新春の慶びに加えて六条院という異郷に見紛う麗しい世界の有様がこのことばに続いて語られる。

## おわりに― 求められる人文知

これまで「長滝の延年」で語られる詞章において、王朝文芸を初めとするさまざまな日本文芸の片鱗が見いだせることを指摘してきた。特に謡曲の影響の大きさについては否めないものがある。その謡曲にも、王朝文芸の翻案や引用たる本説が多々見受けられる。こうした文芸の伝播については解明されていないことが多い。しかし、蓄積という点から言えば、これはまさしく継承されていたものの一部である。むしろ王朝文芸がこの「長滝の延年」に直截影響を及ぼしていることを言い立てているわけではない。歌詞のいくつかは幾多の場所を経巡り、さまざまな文化的環境の中で変転しながらも郡上の地に建立する寺社の、宗教儀礼を司るものとして残存したのである。伝承され残存したという事実を注視したい。六日祭の細部においては、昭和の時代にも花笠を取る若者の怪我により形の一部が変わったとも聞く。時代の中で変遷を遂げながらも古に辿れる文化事象を見いだせること、そして、その辿った変遷の中に王朝文芸の片鱗が見えることを本稿では重視した。

今回は「長滝の延年」について、詞章の一部を取り扱った。白鳥神社にはこの祭りの外にも「白鳥おどり」が民俗芸能として演じられている。江戸時代まで遡ることが出来るこうした盆踊りも、担い手の交替や詞章の一部残存など、文化継承をめぐる問題が見いだせそうである。今後も文化継承において、人とくらしの関係が大きく関係してくることであろう。残存させることの意

義は十二分に理解されるところであるが、伝承することに関して現代は伝承者の確保に関して困難を抱えていることは明記しておかなければならない。

こうした課題に対して、対応できる人間の養成は図られるべきことの一つである。伝承を地域で守る組織の養成ももちろんであるが、そのことに興味関心を抱く地域外部の存在も忘れてはならないだろう。外部者が当該地の文化事象、たとえば遠地の伝承文化などに「触れる」という体験は相互嵌入的である<sup>(37)</sup>。その伝承された地域に対しての理解というものは、翻って外部者にとつて自明な日常生活を揺り動かすものとなる可能性がある。また異質な文化との接遇は、日頃自身が行う物の考え方や生活の仕方、人々の結びつきへ価値転換を図ることもあるだろう。特に都市生活者の場合は、地域が育んできた人々の記憶に参与し、それらを何らかの形で記述することによって、その地域の文化に深くコミットメントする、もしくはコミットメントできる行為に繋がると考えられる。祭礼の一部始終ではなくともその一部を何らかの方法で記述し、それを他者へ伝えていくことにも伝承に対する意義を見いだせるだろう。

ただし、記録と一口に言っても、どのような立場から残存されたものか、その数字の根拠は何か、と問う姿勢も求められる。結果としてではあるが、必ずしも正答はないと言っても過言ではない。何を記録とするのかというオーセンティシティへの間は消えてくならないだろう<sup>(38)</sup>。ここにこそ伝承のアポリアが存在する。現在、記録という形でのアーカイブ化が一つの方法として取り入れられている<sup>(39)</sup>が、そうした方法論に対しても絶えざる検証が求められるだろう。関係する各位がそれぞれの立場からの問を手放さず、研究の現場が検証の現場となるように、未来への文化継承に向けて、人文知の醸成を促したいものである。

## 謝辞

本稿を成すにあたって、岐阜県郡上市長滝白鳥神社宮司若宮多聞ご夫妻より若宮修古館に収蔵されている文物の閲覧(二〇一四年四月二九日)をはじめ、「六日祭」当日(二〇一五年一月六日)の採録にご便宜を頂戴した。記して謝意を陳べる。

ば霞を分けて降る雨に濡るとも行かん山桜」の詞章が見える<sup>(30)</sup>。傍線部は当該歌「桜狩り雨は降りきぬおなじくは濡るとも花の影に」歌を典拠とするであろう。鎌倉時代に貴族・武士・僧侶の間に流行した早歌の詞章と延年の詞章が共通した典拠を持つていることが確認される。早歌も「長滝の延年」の詞章を伝承する経路の一端を担っている可能性が見える。

さらに謡曲においても、番外謡曲の「犀」「花櫓」「籠祇王」「小尉」に、当該歌を元にした詞章が見いだされるという研究がある<sup>(31)</sup>。

### 3-2 「橘の香」

「花もただ古き情けを忘れねば昔の人の 袖ぞゆかしき昔の人の」

「橘の香をとめて昔の人の 袖ぞゆかしき昔の人の」

「匂ひこそすれ昔の人の 袖ぞゆかしき昔の人の」

以上の詞章部分は、『古今和歌六帖』にも入集された『古今和歌集』巻二夏一三九「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」<sup>(32)</sup>が本歌の一つとして同定出来よう。「五月を待つて咲く花橘の香りを嗅ぐと、昔親しんだ人の袖に焚き込めた香りが思い出される」と訳出されるこの歌は、その後『和漢朗詠集』にも入集されて、人口に膾炙された。また、この歌を本歌として多くの歌が後世詠出されている。一方『伊勢物語』の第六〇段にも同歌が見える。宮仕えに忙しい男と別れて地方役人の妻となった女のもとに、かつての男が宇佐使となって現れた場面で、酒肴に出た橘を手にも男が「五月まつ花たちばなの香をかげばむかしの人の袖の香ぞする」と女に詠んだところ、女は過去の自分を思い返して悔やみ、山寺にて尼になった、という話である。『伊勢物語』の話がこの歌の元話のように受けとられたあまり、この歌の意味が物語に引きずられて変容した様は、『綺語抄』をはじめとする歌学書を見れば明らかである。ここでは歌学書史について詳述しないが、東常縁が飯尾宗祇に古今伝授して成った『古今和歌集両度聞書』には触れておきたい。

心はむかしの人などをおもひたるおりふし橘にふれてかくよめる様なり  
物語には心かはるべし（新日本古典籍総合データベース 宮内庁書陵部蔵 寛永十五年八月 風月宗智写 鷹司本四二三の八六番スライドを私に翻刻して濁点を施したもの）

という解釈が見える。本書は常縁が宗祇に伝授し宗祇が書き留めたものである。内容は、「五月まつ」歌と昔男が歌った『伊勢物語』とは無縁のものである。

あるというものである。確かにまず古歌があったのであり、『伊勢物語』はその古歌を引用して創作されたものと見てよいであろう。東常縁は文明三年一月二八日から四月八日まで伊豆の三島で宗祇に古今伝授を行い、文明三年五月八日以降、美濃郡上へ赴き伝授を続け、文明五年には宗祇への伝授が終了している<sup>(33)</sup>。郡上の土地が古今伝授の場所となったことを勘考すれば、この詞章が延年に残存している事と相まって、『古今和歌集』所載歌を初めとする王朝文芸への感興が奥美濃にあることをその共通項として括っておきたいと思う。

また、『新古今和歌集』巻三夏 二四四番歌「郭公はなたちばなの香をとめてなくは昔の人やこひしき」も本歌の一つとして検討されてよいと思われる。「たちばなの香をとめて」が詞章と重なる。実はこの歌は『古今和歌六帖』の第五帖「ほととぎす」の項で「時鳥花たち花の枝にゐてなくはむかしの人や恋しき」と同一歌であった可能性が高い。つまり古代より歌い継がれてきたものの流れにある。その結果、『平家物語』『源平盛衰記』で建礼門院徳子が出家の時に歌ったとされる「ほととぎす花たちばなの香をとめてなくは昔の人や恋しき」が掲出されるに至るのである。「花橘の香をとめて」の部分は、早歌「郭公」の「芳しき花橘の香をとめて鳴はむかしや忍ばるる」<sup>(34)</sup>にも見える。こうしてみると、延年の詞章は「早歌」「平家物語」「源平盛衰記」と係わっている可能性が増すと言えようか。ちなみに『平家物語』『源平盛衰記』には白山事件を中心に関連した記事が複数箇所見える。長滝寺が一〇八四年に延暦寺末となったこととも関わりがある<sup>(35)</sup>。

### 4 「新玉の」田歌

「新玉の年立ちかへる朝よりそよの 朝より 朝より待たるものは鶯の声そよの」の詞章が田歌に見える。「田歌」とは、『日本国語大辞典』によると「田植のときの歌をとり入れて儀式歌謡としたもので、大嘗祭の田舞や各地の社寺などの田植神事、田遊びでうたわれる。また、ひろく田植歌をいうこともある。」という。また、「田歌」は大嘗祭で歌舞される「大和歌」のなかにかつて入っていたが、現在奏されなくなっている。

「新玉の」の本歌は、『拾遺和歌集』春 巻一「延喜御時、月次御屏風に」の詞書を持つ素性法師の歌「あらたまの年立ち帰る朝より待たる、ものは鶯



て出ていた。「当弁」では梅と竹の精が若輩の者によって演じられる。梅・竹の詞章は以下の通りである。

梅「それ、梅は百木の先に開きて、匂い千秋の嵐を含む。目出たかりけるこの時かな。かかる殊勝の砌に候間、これは梅と申す者なり」

竹「それ、竹は万歳の世々を重ねて一天に納まり。目出たかりける折節かな。かかる殊勝の砌に候間、これは竹と申す者なり」

「梅」の詞章に見える「千秋」は物事の終わりを意味し、何時までも変わらなく薫る梅の芳香を言い当てる。雪が降る寒さの中で春の先駆けとして咲く梅を愛でる詞章である。「竹」の詞章に見える「万歳」は、字義通りいつまでも生き栄えること、祝うべき、めでたいことをさし、「千秋」と「万歳」は「嘉辰令月」においても見いだせる吉祥のことばであり、対句として「千秋万歳」と用いられもする。「酌取り」から「当弁ねり歌」へと繋がりをもって、新春を言祝ぐことばが並んでいることが理解される。

## 2-2 関寺小町

謡曲『関寺小町』には、「呉竹の世々をへてすむ行末のいく久しきぞ万歳楽」という詞章が見える。この詞章に見える「呉竹の」は、「世々」の枕詞にして、「よ」「末」を縁語として導く。かつ「世々」は竹の「節々」という意味をもたらし掛詞、また、「行末のいく久しき」のところは「行」と「いく」の韻を踏み、「呉竹の」以降が序詞となつて「久しきこそが祝うべきめでたいことである」という意味を導き出す。こうした技巧がよく見える歌である。この歌句は、長滝の延年において若者が演じる竹の精の詞章との相似が認められよう。これも、吉祥を表出する際の常套的なことばの使用方法である。

ところで、謡曲『関寺小町』は、現在の滋賀県大津市の逢坂山山麓にある長安寺と呼称される近江関寺のほど近くに庵住みをしてた小野小町が、庵を訪ねてきた稚児たちに歌道について語り、関寺の七夕祭に招かれて舞を舞うという内容である。稚児が登場している点に着目してみると、老いた小町が稚児の舞にひかれて思い出の舞を舞い、昔をしのぶところに、生々流転の思想を読み取れると同時に、若輩者の舞が小町ならずも人々に感興を催し、老女の嘆きの大きさを感受することもできるという特長を指摘し得る。それに寄与しているのが稚児という若輩者の存在である。受け身ではなく動く若輩者の登場は、命の久しいことへの祈りへと帰着させる<sup>27</sup>。時代に規制された

人間の営みではあるが、舞台上の演技であるがゆえに未来が先取りされ、言祝ぐことができる非日常空間を創出しているという点で、祭祀空間と軌を一にしているとも解釈できようか。「長滝の延年」でも当弁の梅の精・竹の精が若輩者によって舞われるところに、『関寺小町』において若輩者の舞により長命を言祝いでいるのと同等の要素を見いだし得る。

## 3 「桜狩」「橘」当弁ねりうた

梅と竹の精を演じる若人の掛け合いのような詞章に注目する。

### 3-1 「桜狩」

梅の歌に「桜狩雨はふりきぬ同じくはぬるともはなの」影に宿らん」とある。これは、『拾遺和歌集』に題知らず・読み人知らず歌として所収されている卷一春五〇「桜狩雨は降りきぬおなじくは濡るとも花の影に隠れむ」<sup>28</sup> 歌と同定される。同歌は、末句を「かげにくらさん」として『撰集抄』にも載る。

『撰集抄』卷八 一八話

むかし、殿上のおのこども、花見むとて東山におはしたりけるに、俄に心なき雨のふりて、人々、げに騒ぎ給へりけるが、実方の中將、いと騒がず、木のもとによりて、かく、

さくらがり雨はふり来ぬおなじくは濡るとも花の陰かげにくらさん<sup>やどら</sup>とよみて、かくれたまはざりければ、花より漏りくだる雨にさながら濡れて、装束しほりかね侍り。此こと、興ある事に人々思ひあはれけり。又の日、斉信大納言、主上に、「かゝるおもしろき事の侍りし」と奏せられけるに、行成、その時蔵人頭にておはしけるが、「歌はおもしろし、実方は痴なり」とのたまひてけり。この言葉を実方もれ聞きたまひて、ふかく恨みをふくみ給ふぞと、聞え侍る。

岩波文庫『撰集抄』二五〇～二五一頁

藤原実方<sup>29</sup> は、『古事談』によれば、藤原行成との争いによって陸奥国司に左遷され、九九九年に馬から落ちたことがもとで亡くなったという。実方は中古三十六歌仙の一人で、後世西行にもその歌蹟が忍ばれた歌人である。

また、国立歴史民俗博物館蔵『六家抄 下』の紙背文書に見える早歌譜のうち、新出の「四季恋」春部に「春や昔の春ならぬ」という『伊勢物語』四段を本説としている早歌がある。その中に、「恋しさにそなたの空をながむれ

て奉仕しなければならないと思っていることが語られる。

角川書店刊『源氏物語評釈』で玉上琢也氏は、「今の帝の殿上している若君達には、その道（稿者注・歌舞音曲）に堪能な者が多い。そういうことも、男踏歌を催された理由の一つであろうか」と推測される。礼楽思想が世を覆う社会においては、優れた音楽がこの世に響き渡るのは良き政治が行われていることの表れである。物語の場面が宮中の紫宸殿ではなくそこからさらに移動した冷泉院という院宮であり、光源氏を父とする上皇冷泉院と今は亡き光源氏の子息で、右大臣となった夕霧の子息一族に光が当たっている。光源氏亡き後の世において、繰り返し光源氏が世当時のことが思い出されているという場面でもある。

なお、青柳隆志氏の調査<sup>23</sup>によると、この句の「朗詠」の初見は、安和二（九六九）年一月二日、小野宮関白太政大臣藤原実頼の邸で行われた宴遊の際のもので、以後、「臨時客」や「産養」などの儀式や、「勸学院歩」などにおいて用いられているという。この祝言の句は汎用性のあるものにつき、あらゆるところで見いだし得る。「長滝の延年」で謡われる詞章は、このように古代まで遡ることができるのである。

ちなみに「菓子・果物」はくだものと読み、古代において主食ではない木の実などを指した。「長滝の延年」においても実際「餅・粿・麦・粟・山栗・胡桃」等が菓子台に据えられ、「まくり」の場面では参拝客に振る舞われた。

## 1-2 大原や

次に検討するのは、傍線イ「大原や小塩の山の小松原、はや木高かりける千代の影見む」の詞章についてである。『後撰和歌集』巻二十 賀「左大臣家の男子女子冠し、裳着侍りけるに」の詞書で所収された「一三七三大原や小塩の山の小松原はや木高かれ千代の影見む」という紀貫之歌が、該当歌である<sup>24</sup>。左大臣藤原実頼の子が成人戒に臨んだことにちなむ作歌である。現代語訳として新日本古典文学大系本の訳を掲出すると、「大原の小塩の山の小松の原は早く木高くなりなさい。千年も栄え茂るその影を見たいとおもいますので」となる。「大原や小塩の山」とは、京都大原野にある大原野神社をさしている。この神社は藤原氏の氏神である春日大社を勧請したものであり、実頼の子女を対象としていることにより選ばれた歌ことばであることは相違ないであろう。同様に子女を意味する「小松原」が祝いの意味を込めて導き

出された。

この歌は、室町時代の猿楽師、能作者であった金春禪竹により作られた「小塩」という謡曲にも一部取り上げられている<sup>25</sup>。京に住む男が友人と連れ立って花見のために花の名所である大原野・小塩山へ出かけた。すると花の枝をかざした老人が現れた。その風貌に興を抱いた男が問いかけると、身こそ卑しかろうと心の花こそ問題と応え、業平の歌「大原や小塩の山も今日こそは神代の事も思ひ出づらめ」を口ずさみ、その和歌の意味を説いて花の陰に消える。その夜、男の前に、在原業平の霊が花見車に乗って現れ、二条の后をはじめとする女性との恋を回想し、舞うという内容である。『伊勢物語』に出てくる恋の物語や歌を元に作られた三番目能（鬘物）に分類されている。中にワキの台詞として「げにげに妙なる梢の色や、花の色に映った美しい花影も多いこの大原や」とあり、それに続けてシテが「小塩の山の小松が原より、煙る霞の遠山桜」と応える。ここには在原業平歌である「大原や小塩の山も今日こそは神代の事も思ひ出づらめ」と相通する歌ことばである「大原や小塩の山」について、謡曲が貫之歌を引いたということが理解される。また抑も貫之歌が祝いの歌としての性質を有することにより、正月延年の詞章に多い「花見」に祝いの心を込めて、延年の詞章にも引いたと言えようか。つまり、謡曲と延年の詞章、双方の必要によりこの歌曲が引用された様を確認できるように思われる。謡曲「小塩」は、小塩山という神代の古跡において、和光同塵の影に神として、また花に映した仏菩薩の化現として、業平がこの世の衆生済度の方便として示現したと説くものであり、その中世以降における仏教の教理伝播を勘考するに、延年舞の詞章にこの謡曲の影響を見取することは首肯できるのではあるまいか。

## 2 「千秋」「万歳」当弁

### 2-1 千秋と万歳の言祝ぎ

古来梅と竹は、「歳寒三雅」と並び称される。金井紫雲の『東洋画題綜覧』<sup>26</sup>において「歳寒三雅」題のものは、尾形光琳筆（説田鶴翁旧蔵）・尾形乾山筆（松本双軒庵旧蔵）・乗園作『三幅対』（藤田男爵家旧蔵）・山本梅逸筆（説田家旧蔵）・渡辺崋山筆（神戸鹿峰旧蔵）を数える。「歳寒三友」となると松が入るが、「長滝の延年」ではすでに「酌取り」において、「松」は「小塩山の小松原」とし



める所作との近似性を指摘する<sup>19)</sup>。また、中田武司氏は『年中行事秘抄』の「詔男女無別、闇夜踏歌事」および『日本書紀』持統天皇七年正月一六日の「是日漢人等奏踏歌」という記述により、「この時代の踏歌にはまだ新しい輸入文化の香りが存した」が、「いとも簡単に日本の文化に融合し、やがては「年中行事」として定着するのには、それなりの素地が必要であった」とし、その素地に「歌垣」の風習を挙げる<sup>20)</sup>。「歌垣」では男女が出会える場であることから互いの「歌を掛け合う」という行為が欠かせない。「踏歌」における「歌」の重要性に着目した際、中田氏の「歌垣」への言及は、唐の踏歌の、早い和様化への根拠として一定程度の妥当性を持つものと思われる。

寛平元（八八九）年には男踏歌が一月一四日に実施され、以後同型式で同日男踏歌が行われたが、儀式の中止・再開を経て、永観元（九八三）年の踏歌を最後に、男踏歌は中止された。一方、女踏歌は毎年行われていたが、平安後期に中絶を迎えている。男踏歌の一般的な形は、正月十四日に清涼殿東庭において帝の前で歌を歌い足拍子にて演舞するものであり、清涼殿での舞が終了すると、院、中宮、東宮などを練り歩き、同様に踏歌を舞い、暁に宮中に帰るもので、例年ではなく数年を隔てて行われた。

『源氏物語』初音巻には、中絶してしまった男踏歌の場面が宮中ではなく六条院において挙行されている様が語られる。『源氏物語』執筆当時には行われてはいなかった「男踏歌」をあえて物語に載せているのは、一条朝より大凡九〇年以前の物語世界設定に対して、より現実味を持たせることであるという理由も考えられるが、一方光源氏が創設した六条院の華麗さと、皇権を凌ぐ雅の王として光源氏の正当性を印象づける語りとりとなっている。

ことはをとこたうかあり。内より朱雀院にまありて、次にこの院にまゐる。道のほどとほくなどして、夜明け方になりけり。月曇りなく澄みまさりて、薄雪すこし降れる庭のえならぬに、殿上人なども、物の上手多かる比ほひにて、<sup>ア</sup>笛の音もいとおもしろう吹きたてて、<sup>イ</sup>この御前はことに心づかひしたり。御方／＼物見に渡り給ふべく、かねて御消息どもありければ、左右の対、渡殿などに、御局しつ、おはさす。（中略）ほのぼのと明ゆくに、雪や、散りてそゞる寒きに、<sup>ウ</sup>竹河うたひてかよれる姿、なつかしき声／＼の、絵にもかきとゞめがたからむこそくちをしけれ

初音巻 新大系②三八九―三九〇

物語の場面が宮中ではなく、光源氏の領有する六条院であり、そこで万全の心用意がなされて演奏されていることが、傍線イよりうかがえる。また、傍線ウにあるように、ここでは、催馬楽の「竹河」が歌われていた。

「竹河」は呂調で歌われるものである。詞章は「竹河の橋の詰めなるや橋の詰めなるや花園にはれ花園に我をば放てや我をば放てや少女たぐへて」<sup>21)</sup>という恋愛の歌で、平安時代の宴席でよく歌われた歌謡の一つである。現在の三重県明和町竹川の地が、その伝承地とされている。かつては川岸の低湿地であったようで、そこに花が咲き乱れ花園のような場所となっていたのであろうか。催馬楽には、その花園で一緒に過ごしたいという若い男女の願望が見える。こうした催馬楽を謡うのは若人であり、源氏は「万春楽」と、御口ずさみにのたまひて（三九一頁）と、「万春楽」を口ずさんでいる。踏歌の折に雅楽の「万春楽」「千秋楽」が舞曲として奏でられたことを物語っている場面でもあろう。「嘉辰令月」の詞章は出てこない。「万春楽」は、紫宸殿南庭の男踏歌で奏せられた曲名<sup>22)</sup>で、「踏歌章曲」に、「我皇延祚億千齡万春楽元正慶序年光麗……」とある七言四句末の「万春楽」を、三度朗唱するので、その詞章である「万春楽」の部分が物語に取り上げられたことがわかる。

さらに竹河巻においても「男踏歌」の場面がある。

その年返りて、をとこたふかせられけり。殿上の若人どもの中に、もの上手多かるころほひなり。その中にもすぐれたるを選らせ給て、この四位侍従、右の歌頭なり。（略）一四日の月はなやかに曇りなきに、御前より冷泉院にまゐる。（略）内のお前よりも、この院をばいとほづかしう、ことに思ひきこえて、みな人用意加ふる中にも、藏人の少将は、見たまふらんかし、と思ひやりて静心なし。にほひもなく見ぐるしき綿花も、かざす人からに見分かれて、さまも声もいとをかしくぞありける。竹河歌ひて、御階のもとに踏み寄るほど、過ぎにし夜のはかなかりし遊びも思ひ出でられければ、ひが事もしつて涙ぐみけり。（略）

竹河巻 新大系④二七九―二八〇

四位侍従とは、世間的には光源氏の息男となっている薫のことである。光源氏逝去後の世界にあって注目される存在であり、今回は踏歌の音頭を取る役に抜擢されている。初音巻では宮中よりも心用意が必要であった光源氏邸について語られていたが、光源氏亡き後、光源氏の実の息男である冷泉院に対し、踏歌の行列を組む貴公子たちや地下人（じげうど）一行は、帝よりも気を引き締め

古式を留めているとはいえず、現状の祭において江戸期以前に遡る記録資料は見いだせない。また、現代語に置き換えられたところや演技自体が現代的な風潮の中で改変されているところがあり、その意味するところは薄くなりつつある。さらに、本稿で着目している歌の詞章には明らかに能の影響が見えており、最早延年を「法会の余興」とのみ、一括りに理解することは首肯し得ないのではないか。以下、「長滝の延年」に関する基礎情報を確認していきたい。

### 三 長滝の延年

「長滝の延年」の記録として、文禄四（一五九五）年、経開坊慶倫『白山長滝寺修正延年之次第』や慶安元（一六四八）年、経開坊慶祐『修正延年並祭礼次第』がある。「長滝の延年」は、これらの記録によると「修正延年」と呼ばれ、白山長滝寺の修正会の中で行われた延年というように、経歴が名称に残っていることが分かる。『修正延年並祭礼次第』に「六日の祭は若輩の祭なり」とあり、若者や子方と呼ばれる幼童が関わっていた<sup>(15)</sup>。修正会は、中国の年始の儀式を起源とし、護国仏教思想と春迎えの民間習俗が混合したものであり、日本においては、正月初めに新年の天下泰平を祈る法会をいう。期間は通例大晦日から正月六日までの七日間である。近世の六日祭については、元禄三（一六九二）年長滝寺文書『莊嚴講執事帳』などに見ることができ、新年の安泰と豊作を祈る修正会で、最終日の一月六日に行われたという。既述の通り、本来の修正会という法会の余興から延年そのものを主体とした行事となったのではないかというのが通説であるが、長滝では「六日祭」という長滝白山神社の例祭の形で、現在も長滝白山神社の氏子によって伝承され、継続して行われている。なお、昭和五二（一九七七）年、国の重要無形民俗文化財に指定された。延年の祭次第は、「酌取り」「当弁」「露払い」「乱拍子」「田歌」「花笠ねり歌」「当弁ねり歌」「しろすり」「大衆舞（はっさい）」と続く。それでは、以下「六日祭」における現況の詞章一部を取り上げ、その伝承について見ていきたい。

### 四 歌の詞章

慶安元（一六四八）年の『修正延年并祭礼之次第』によれば、「酌取り」の

場面で「菓子ぼめ」が行われたとある。「酌取り」は、舞台中央に菓子台をしつらえ、酒をふるまう盃事の一つである。「筥の清め」「膳直し」「見せ酌」「菓子台の盃」「菓子台まくり」などがあり、酒宴の所作を演舞する<sup>(16)</sup>。稿者が採録した二〇一五年の上演では、上酌、下酌の四人で演じられた。酌取りの最後に菓子台に供えられている菓子を参詣者に撒き与える。米・粟などの穀物、山栗・胡桃などの果物を中心に菓子も撒かれた。以下、詞章を見てみよう。

#### 1 「嘉辰令月」「大原や」酌取り

##### 1-1 嘉辰例月

菓種老僧役が立つて

「<sup>ア</sup>嘉辰例令月飲び無<sup>レ</sup>極、万歳千秋ノ楽ミ未半也。目出度かりける此時哉、かかる殊勝の砌に候間、今日の菓子の趣、<sup>イ</sup>大原や小塩の山の小松原、はや木高かりける千代の影見むと云、如何様祝言の心にて有けるに候、面白候。扱<sup>さて</sup>いかにと申候へば寺家神領の万目出度に、満山の栄花。

と言ひ、次に脇の者が

「扱今日の菓子の趣一段殊勝に候、先我が山の威光或は菓子の珍敷目出度よそほひ、又は郡主諸旦那富貴繁昌の処、参詣の道者群集<sup>ていたらく</sup>の爲躰」と続ける。

傍線ア「嘉辰例令月飲び無<sup>レ</sup>極」は、藤原公任撰『和漢朗詠集』巻下「祝」に収められている朗詠の一部である。出典は、通説によれば中国の詩人謝偃の雜言詩で、歌詞は「嘉辰令月飲無極 万歳千秋楽未央」と音で読む。平安時代の年中行事や成育儀礼において「嘉辰令月」は、読書始、参賀、法楽、五節淵酔、着袴、産養、臨時客等で朗詠されていた<sup>(17)</sup>。この句は音読による朗詠という点で特異なものであるが、その淵源に「踏歌」があると指摘されている。本稿で考察している「長滝の延年」では「未半也（いまだなかばなり）」と訓じている。文治二（一一八六）年六月二〇日に行われた藤原兼実邸勸学院歩では、音読の後に訓詠が行われたことが『玉葉』に記載され、『江談抄』巻四にも当該詩句が見え、踏歌の折に朗唱されたとある<sup>(18)</sup>。ここに見える「踏歌」は、『日本書紀』『続日本紀』にも見える少年童女が正月に演舞する行事で、平安時代前期、光孝天皇の代までは、ほぼ毎年女踏歌が行われたことが分かっている。白田甚五郎氏は中国『唐書』を参考に、土地や家屋の精霊を踏み鎮



の悠紀国・主基国に卜定されている。孝謙天皇天平勝宝元年七四九年主基国、称徳天皇天平神護元年悠紀国、淳和天皇弘仁一四年悠紀国となった。淳和天皇代の大嘗祭では風俗歌として「美濃山に繁に生ひたる玉柏豊の明に会ふが愉しさや会ふが愉しさや」という詞章の「美濃山」が下河辺長流『梁塵愚案抄』により伝わる<sup>(9)</sup>。院政期には、白拍子の唱う今様が京師の貴族たちの間で流行した。後白河院が美濃国の青墓の傀儡子を師に今様の修練していたことが知られている<sup>(10)</sup>。

中世では領主土岐氏と守護代斎藤氏の人脈を介して都人との文化的な交流が見いだせる。例えば、室町時代文和二（一三五三）年に京師より退却を余儀なくされて美濃に退出することになった北朝後光厳天皇のために、土岐頼康が頼宮を西濃に用意するなどの事蹟や二条良基の来訪や交流が『小島のくちすさみ』によって把握できる<sup>(11)</sup>。こうした都人の来臨・来訪や交流の事蹟に関して、土岐氏族は、武人にして勅撰和歌集の入集する歌人としても名を連ねる者を輩出する家であり、文芸ばかりでなく絵画や仏具においても優品の制作・収集や絵師による絵画残存を奨励しており、文化継承への熱意を感じさせる点からも傍証できよう<sup>(12)</sup>。

同じく斎藤氏においても同様の点が指摘し得る。斎藤利永が正徹に和歌を学び、連歌の名人とも称えられる妙春が、一条兼良と親交を結び都人と文芸を介した交流を図った事蹟についても、詳細な研究がある<sup>(13)</sup>。

十五世紀に美濃篠脇城主東常縁が『伊勢物語』『徒然草』の書写・校合をはじめ『古今和歌集』『新古今和歌集』の口伝を整理した歌学書『東野洲問書』等を執筆したこと、および門弟宗祇に古今伝授をしたことは有名である。これらは一例に過ぎないが、美濃という地域と京師との間で交流があり、文芸を初めとするさまざまな文物や宗教を介して多くの人物が往来していたことが理解される。

さらに連歌師の動きに伴う伝播という要因も想定されるところである。鎌倉時代から南北朝期にかけて興隆した花の下連歌は、花鎮めという宗教性を淵源に持ち、他人の詠んだ春の句に自句を付けていくところに趣向を懲らす集団的詩作であるが、その場を寺の境内などに持ったところに特長がある。そして、そこは堂上ではなく地下<sup>じげ</sup>の者や僧侶が多く集う場であった。こうした集団文芸は、古代の歌垣、歌の掛け合い、平安時代の歌合や歌会、室町時代の小歌等、各時代で形式を異にするも脈々と行われてきた座の文芸と言える。

「長滝の延年」の詞章に「花」という言葉が多く見える。むしろ、花を歌い上げるところに、花鎮めを想起させもする。そして、「長滝の延年」の詞章も対をなして言葉を掛け合い、演技し合う形である。そこには先述した座の文芸との共通項が見いだせるであろう。連歌師の広汎な移動は、文芸や文化の伝播においてさまざまな寄与しているとおぼしい。以上、京師との地理的利点を軸として美濃国における文化・文芸の伝播を概観した。むしろ奥美濃の長滝に詞章をこれらの人物たちが直截齎したと断じているわけではない。奥美濃は遠く中国からの文物を招来させる大きな文化的経済的勢力を持つ土地であり、さまざまな人物たちが往来した地であるという事実を確認しておきたいのである。本稿は、「長滝の延年」の詞章に奥美濃長滝の豊かな文芸享受の足跡を見いだすことを目的の一とする。

## 二 延年について

延年とは、宴席における歌舞の一種で、平安時代中期から室町時代にかけて興福寺・東大寺・長谷寺・延暦寺・圓城寺等の寺院で法会の後および貴族接待のために行われたものをさすというのが、一般的理解である。また、長寿を言祝ぐ「<sup>かれいえんねん</sup>退齡延年」から名づけられたともいわれる。

これに対し松尾恒一氏は著書『延年の芸能史的研究』<sup>(14)</sup>において、延年が「法会の余興」として始まったとする通説に対し、むしろ賓客来臨や任官儀礼の際に開催されたことを明らかにし、かつ、「興福寺延年」における講師房延年は、維摩会で講師の大役を勤めた学僧への祝賀を目的として開催されたとする。さらに、院政期に発生した延年について、本来厳肅な学問儀礼である仏事に、衆徒の示威行為として割り込む形で発生した延年の「結構」が、当初から異形の芸能としての性格をもち、風流・ばさら・かぶきに連なる反体制的な側面を有していたこと、さらに大衆が催す延年の祭儀が、体制側に属する寺家政所との間の緊張関係の中で、軍事的デモンストレーションとしての役割を果たしたことを指摘する。その結果、時代が下るに従って延年の「もどき」化が進み、近世においては能の演出を取り入れて成立したという説を掲げた。松尾氏の、延年風流という芸能の内容についての分析や延年の「舞催」役についての指摘は、興味深い。確かに「六日祭」における「菓子ぼめ」には饗応の形が残っており、「賓客来臨」の形式を留めていると指摘し得る。ただ

## 「長滝の延年」の詞章にみる王朝文芸

\* 井上 眞弓

はじめに

岐阜県郡上市白鳥町長滝にある長滝白山神社（白山神社の別当寺としての長滝寺）では一月六日に「六日祭」が催され、拝殿において「長滝の延年」が奉納される。これまで「長滝の延年」については、本田安次氏が一九五五年一月六日に採訪した記録<sup>①</sup>をはじめ、五来重氏の論考<sup>②</sup>等により、古式を伝承している宗教的芸能としての観点から説明が試みられてきた。それに対して近世修験道のあり方を研究する由谷裕哉氏は「六日祭は白山修験の延年か？」<sup>③</sup>論において、六日祭が近世修験道と無関係なのではないかとする論を提起し、これまでの通説に対して一石を投じられた。こうした儀礼の構造的分析に新たな動向が見られることは、当該研究を進展させる契機を得たと言えるであろう。由谷論文は今後着目されるべき観点を有していると思われる。今後の学問的醸成を俟ちたい。

本稿は、こうした先行研究によって広め深められた構造分析以前の、祭り歌の詞章に刻まれた文化の様相に着目することにより、王朝文芸が詞章に残存していることについて検証を試みるものである。まずはこの遊宴芸能を紹介し、延年にて歌われる詞章の王朝文芸とのかかわりを概観する。ことばに刻まれたものを通して、芸能の根源にこめた文化の様相を確認したい。併せて伝統文化の継承における保全・保持の問題についても触れていきたいと思う。

## 一 長滝白山神社・白山長滝寺の位置する地域に対する文化的視座

今の岐阜県、旧美濃国や飛騨国には現在でも多くの地芝居が伝承され、その演目の多くは能・狂言・歌舞伎・文楽に題材を得ていることで知られている<sup>④</sup>。まずは美濃・飛騨の旧両国が、こうした文化的立地条件にあることを踏まえておきたい。本稿で扱う「長滝の延年」は、現郡上市白鳥町長滝にて

演じられるものである。白鳥町長滝は、福井県との県境に近く、旧藩という飛騨国とも境をなす立地にあり、所謂奥美濃と称される地域にある。現在でも白鳥町内で嘉喜踊り<sup>⑤</sup>や白鳥踊りが伝承され、民俗芸能の方面において注視される土地である。

また、古代から伝承されている長良川の鵜飼や美濃和紙の技術保持、『万葉集』巻十一、に「云々々々物者不念斐太人乃打墨繩之直一道二」<sup>⑥</sup>と歌われた飛騨の匠という存在も注視され、この地域は民俗芸能ばかりでなく多方面の文化継承が見られる地域である。

さて、奈良時代前期の僧、泰澄が開いた白山信仰の中心地の一つ、美濃馬場と呼ばれるところが、ここ白山中宮長滝寺である。東海地域から白山登山を目指す際の入り口として繁栄した。現在も中国南宋にて制作されたとおぼしい護法神韋駄天像や善財童子像が安置されている<sup>⑦</sup>。これらの立像は日本において存在する数少ない宋国からの渡来仏である。また、鎌倉時代に制作されたと言われる釈迦三尊像、四天王像も安置されている。清水真澄氏は、これらの仏像を南都の慶派仏師の作なるものと考察されている<sup>⑧</sup>。さらに地蔵菩薩立像は正和五（一三二六）年の銘記があり、花園天皇代鎌倉時代の作であることが判明している。平安時代や鎌倉時代における、威容を誇る大伽藍を擁した白山中宮長滝寺の姿を想起することができよう。室町時代に火災等により中絶の時期があったが、享祿二（一五二九）年、経聞房に隠居していた道雅が阿名院として長滝寺を再興したとされる。

明治に廃仏毀釈が行われ、現在は便宜上、長滝白鳥神社と長滝寺に分かれている。

美濃国は、湖上通行を含め琵琶湖・東山道を経由すると京師より数日で行着できる立地にある。この地理的な条件が幸いして、古代では奈良時代の霊亀三（七二七）年、元正天皇の美濃行幸があり、『続日本紀』によると大嘗祭